

P1-523 向精神薬服用妊婦から出生した新生児の管理

琉球大

大久保鋭子, 石底アキ, 正本 仁, 佐久本薫, 青木陽一

【目的】向精神薬を服用中の精神疾患合併妊婦から出生した児の症状を機部らの Neonatal depression チェックリストを用いて評価し、新生児の適切な管理について検討した。【方法】2004年から2006年5月の期間に精神神経疾患合併妊婦20例(双胎1例)から出生した新生児21例を Neonatal depression チェックリストを用いて後方視的に評価した。本チェックリストは新生児の症状を中枢神経, 消化器, 自律神経, その他に分けて症状を1~5点を与えて評価する。(傾眠1点, 不安興奮状態3点, 痙攣5点, 下痢2点, 多呼吸1点などである。8点以上は治療が必要なことが多いとされている。)【成績】母体の精神疾患は統合失調症12例, 大うつ病性障害2例, 双極性障害1例, パニック障害1例, 境界性人格障害2例, 一過性精神障害1例, 精神発達遅滞1例であった。20例中15例(75%)が向精神薬を服用しており, 抗精神病薬16例, 催眠薬12例, 抗うつ薬2例, 抗不安薬1例が投与されていた。中枢神経症状は易刺激性6例, 不安興奮5例, 興奮時振戦3例, 出生直後に挿管が必要であった無呼吸発作が1例であった。消化器症状は嘔吐6例, 下痢6例, 哺乳緩慢2例であった。自律神経症状としては多呼吸7例, 発熱3例であった。症状が重複する新生児を認めた。合計点数は0点から8点まで広く分布し, 治療の適応とされる8点以上を示したのは1例のみであった。児の38%が人工乳で哺育され, 母の精神疾患悪化のため2例の児が施設収容となった。【結論】向精神薬服用妊婦から出生した新生児は中枢神経, 消化器, 自律神経など多彩な症状を示す。出生直後に気管内挿管が必要な例もあり, 分娩時に新生児蘇生の準備が必要である。長期予後は今後の課題である。

P1-524 周産期致死性先天異常を疑われた胎児と妊婦の転帰

獨協医大

岡崎友紀, 渡辺 博, 根岸正実, 林田綾子, 庄田亜紀子, 岡崎隆行, 多田和美, 西川正能, 大島教子, 田所 望, 深澤一雄, 稲葉憲之

【目的】出生前診断技術の進歩により, 多くの胎児疾患の診断が可能となり, 胎児期, 出生前後, 新生児期の治療で予後が改善されている。一方, 致死性と診断される疾患が存在する現状もある。周産期致死性先天異常を指摘された妊婦の周産期経過と児の転帰を検討し, 妊娠継続に至った妊婦, 家族に対する情報提供のあり方や治療方針を検討することを目的とした。【方法】1995年から2006年8月に, 22週以降で周産期致死性先天異常を指摘され, 当科で妊婦健診を行った妊婦とその児42名を対象とした(双胎4組, 対象児5名)。【成績】児の42名はPotter sequence 13名(早期新生児死亡13名), 無脳症7名(死産3名, 早期新生児死亡4名), 骨系統疾患5名(早期新生児死亡3名, 乳児死亡1名, 児童死亡1名), 全前脳胞症4名(死産1名, 早期新生児死亡2名, 後期新生児死亡1名), 高度胎児水腫5名(死産2名, 早期新生児死亡3名), その他8名(死産1名, 早期新生児死亡3名, 児童死亡2名, 生存2名)であった。生存例は, 低フォスファターゼ症, Pena-Shokier 症候群であり, いずれも前児は同一疾患で早期新生児死亡となった。また, 当科では無脳症を除き, 自然陣発を待つ方針であるが, 在胎週数は25-30週:3名, 31-36週:29名, 正期産10名であり, 分娩様式は骨盤位分娩13名, 頭位経膈分娩14名, 帝王切開12名, 他施設3名であった。母体合併症は子癇1名, 常位胎盤早期離2名, 肺水腫1名であった。【結論】周産期致死性先天異常と出生前診断された児の転帰は様々であり, 必ずしも周産期死亡となるわけではなく, 常染色体劣性遺伝性疾患の同胞であっても, その転帰は予測と異なった。母体合併症に対しては, 他の妊婦同様の注意が必要である。

P1-525 当院における出生前検査の実態調査

東邦大医療センター大森病院

関根貴子, 前村俊満, 蓬田奈保子, 松江陽一, 宗 晶子, 斉藤 一, 八尾陽一郎, 竹下直樹, 田中政信, 森田峰人

【目的】近年, 高齢妊娠の増加や生殖補助医療の進歩により, 胎児染色体異常のハイリスク群が増加してきている。それに伴い, 日常産科診療において出生前診断の重要性が年々高まってきている。今回, 当科における出生前検査の実態に関して検討した。【方法】当科では, 35歳以上の妊婦全例に対して, 妊娠初期に羊水検査の説明をしており, 夫婦双方から同意を得た例で実施している。調査対象は2003年3月から2006年3月までに当院で羊水染色体検査を行った113例であり, 検査目的のみで他院から紹介された例を含んでいる。検査目的で紹介された以外の症例に関しては, その後の妊娠経過についても可能な限り追跡調査を行った。【成績】羊水検査の平均実施時期は16.99週であり, 対象の母体平均年齢は 36.6 ± 4.08 歳であった。そのうち, 35歳以上の占める割合は全体の73.5%であり, 検査適応でも高齢妊娠が多数を占めた。ART後の妊娠においては, 22例中1例において核型異常を認めた。また, 核型異常の総数は15例で全体の13.2%であった。羊水検査との因果関係は不明だが, その後の妊娠経過で, 切迫早産(入院管理を必要とする)やIUGRの症例が認められた。【結論】今回の検討より, 平均年齢36.6歳において13.2%と比較的高い確率で核型異常を認めた。これは, 羊水検査の重要性を示唆するものと考えられた。また, 核型異常を診断された両親に対して, 妊娠継続や今後の妊娠に対する遺伝カウンセリングをさらに整備する必要があると思われた。